

台風の日からの覚悟から数日たった8月の終わり、次の春の大会に向けて、まずは、秋の大会までの自分の行動を振り返るためのミーティングをおこなった。部員一人ずつについて良いところ、改善してほしいところを指導者6名も含め全員で出し合った。自分の思っていることを表現することが苦手な彼らだからこそ、勇気をもって出た発言は彼らのお互いの心に響くものがあった。それを個人個人が受け止め、これからどうすればよいか認識することができていた。そして、9月。2学期が始まり平日の練習は指導者がグラウンドに常にいる状況ではなく、選手主体のものになっていった。その中で入学してから野球部に入部することを迷っていた選手がやっぱり野球がやりたいと指導者の元へやってきた。彼は髪の毛も短く切り高校野球をやり通す覚悟をもってきてくれた。途中からきたことで他の部員とのチームに対する覚悟や意識はまだ大きくずれていたが、休まずに野球をやろうと努力を続けていた。新たな選手の加入でチームの士気もあがり、9月～11月の土日は2日間で4試合を11人でやりぬくことを目標に勝つための心と身体の体力の向上をはかり、何とか努力を続けることができていた。10月には、秋の大会で自分達の野球ができずに大敗した追浜高校や逗葉高校とも練習試合で対戦し、接戦の試合ができていた。

11月になり、いよいよアウトオブシーズン間近の練習試合、横須賀地区の親善試合として公式戦さながらの雰囲気でおこなわれた逗子高校との試合では、3対2で負けはしたものの投手が粘り強く丁寧なピッチングをし、守備でもエラーをしても下を向かず次の行動に意識を向むけていた。1試合通して集中力が持続できるようになっていた。その後の練習試合でも集中力が大きく途切れることはなくなっていた。それと同時に勝ちゲームが増えていった。全員が確かな手ごたえを感じ、12月のアウトオブシーズンを迎えた。

12月のアウトオブシーズンになると選手たちはモチベーションを保てず、例年だと3月のシーズンに入るまでにチームが崩れていた。今年もやはり1名、野球部をさらなければならない選手がでてきた。11人がまた、10人になり毎日、選手が替わるがわる休み、全員がそろうことが珍しい状態になっていた。その中でも今年には多くの方々が指導に足を運んでくださり、他校の野球部と合同練習に行き、なんとか春に向けて大楠高校野球部への誇りと自覚を積み重ねていった。3月のシーズン近くになり、部を離れていた選手も高校野球をどうしてもやりたいという思いから、自分の周りの状況を整理し、戻ってきてくれた。



3月25日、神奈川県大会予選の横須賀地区予選がはじまった。1戦目の相手は、横須賀工業だった。6回までに6対1の5点ビハインドで大きく点差が開いた状態になっていた。でも、チームの雰囲気はむしろ前を向いていた。集中力も回を追うごとに増していた。すると、6回裏に1点、7回には3点とその差をじわじわと縮めていた。そして9回裏7対5、2点ビハインドの状態、いつもならこれでゲー

ムセットだ。だが、もう秋の大会の時のような彼らではなかった。先頭バッターが出塁すると果敢に盗塁。あきらめるところかさらにチャレンジを続けた。その結果2点を返し、同点とし、延長戦に突入した。しかし、延長11回、最後は9対7と力負けしてしまった。

3月27日2戦目、相手は県大会の上位常連校である横須賀総合高校。今までの地区予選2戦目は、自分達で崩れ、コールド負けというパターンであったが、その不安をいきなり吹き飛ばしてくれた。バッテリーが丁寧に相手を打ち取りしっかりと相手打線を抑え、打線も狙い球を絞り、ヒットを重ねた。気がつくと8回裏。2対1でリードしていた。これでチームは勝てるかもという雰囲気が流れた直後、2戦投げ抜いてきたエースピッチャーの疲れが出始め、連打で逆転を許してしまった。結果は4対2で敗退。今大会も結果は2戦2敗。ただ、これまでの2敗とは大きく違っていった。2試合とも前を向き、集中力を持続させ、勝つことだけを考え戦い抜いたのだ。チームにとって公式戦でのこの結果は「俺らだって、がんばればやれる」という大きな自信となった。彼らの表情もまたひとつたくましさ落ち着いた大人の表情になっていた。17年ぶりの夏の大会での勝利に確実に大きく前進したことを確信した大会になった。

